

《日本研究所研究プロジェクト①》

安藤昌益を再読・再解釈する―「自然真営道」からみえる現代社会の課題

ロマン・パシユカ

江戸時代の哲学者、安藤昌益（一七〇三～一七六二）は世の中を「私法世」と「自然の世」と、大きく二つに分けて論じている。寓話や比喩など様々な形で「私法世」を批判しながら「自然の世」を描写し、その中で自然の体系だけではなく学問の質やあり方、言葉の意味や言語の社会的な役割、書くことの意義など、様々なテーマに触れていく。

本研究では、安藤昌益思想の核の部分に当たる「自然真営道」を再読し、「自然の世」を描く段階で昌益が使用するキーワードを手がかりに現代社会が抱える問題や課題について再考することを目標とした。具体的に、「転地」「活真」「直耕」「不耕」「不耕貪食」

「互性」「男女」「私法世」など、昌益の「自然観」において主要となる概念やタームを明らかにした上で、現代の日本における農業のあり方、男女の平等、自然の破壊などといった現象や問題の認識・解決に向けて新たな課題を提示した。

その新たな課題をどのように表現・発信し、どのように意識してもらえるかという問いにもとりかかり、「自然真営道」の再翻訳について検討し、安藤昌益の思想のアウトラインを教育の現場で取り入れる可能性についても探った。

なお、このプロジェクトの実績としては、以下の通りである。

〈1〉論文

① "Volume on Shintō as Private Law": Fragments from "Shibō shinsō no maki", *Asiatische Studien - Etudes Asiatiques* 71(2), 2017

② "Homo Naturalis" - Andō Shoeki's Understanding of the Human Being, *Critical Perspectives on Japanese Philosophy*, Chisokudō Publications, 2016

〈2〉学会発表

① Is time out of joint? The notion of history in Andō Shoeki's philosophy, IAJAP Conference (Taipei), 2017

② The Power of words: Andō Shoeki's discontent with language as a form of social protest, 1st ENOJAP Conference (Barcelona), 2015

〈3〉講演会

① 「忘れられた思想家」安藤昌益から見た日本の現代社会」、神田外語大学日本研究所主催講演会「世界の中の日本 第四回」、二〇一五年